

第6学年の取り組み

(1) 実践内容「ふるさと甚目寺 ～われら歴史・文化調査隊～」

① はじめに

6年生は、総合学習「われら歴史・文化調査隊」と題して、地域の歴史・文化を教材としてESDに取り組んでいる。昨年度までは、「人の思い」に注目しつつ、総合学習と道徳の連携を通して道徳的実践力を高める活動を行ってきた。また、教育活動全体において人権教育を推進しており、児童が、自分を含めたすべての人はかけがえのない大切な存在であることを知り、相手の気持ちを思いやって行動しようという心を高めたり、他者とのつながりを深めたりするために、異学年交流や構成的グループエンカウンター、ハッピートークトレーニングを取り入れてきた。

本年度は、ESD活動を人とのかかわり合いに焦点を当てた研究、中でも国語科や学級活動でコミュニケーションスキルのトレーニングを目指した授業実践を行った。人とのかかわりの基となるコミュニケーションスキルを学習し、よりよい人間関係づくりを図るとともに、自分の意見や気持ちをその場にふさわしく表現できるようにするためのアサーショントレーニングを行うことにした。

② 「ふるさと甚目寺～われら歴史・文化調査隊～」

ア 「われら歴史・文化調査隊 イン 京都・奈良～わくわくマイプランイン京都～」(4・5月)

5月の修学旅行では、「見て、聞いて、触れて京都」をテーマに、自分たちで立てた京都分散計画に従って、学生ボランティアガイドの方たちとともに、京都の歴史に深く触れる機会もあった。その興味は自分たちの住む地域の歴史へとつながり、6年生の総合学習「ふるさと甚目寺～われら歴史・文化調査隊～」が始まった。

イ 「見て、聞いて、触れて甚目寺①～甚目寺の歴史・文化を知ろう～」(6・7・8・9月)

自分たちが住んでいる地域にまつわる歴史的、文化的遺産の存在を知ることにより、地域の歴史に興味をもち、さらに深く調べようとする意欲を高めた。

(ア) 甚目寺の歴史・文化について学ぼう(6月)【出前授業】

- ・ 甚目寺地域の歴史的、文化的遺産について美和歴史民俗資料館の学芸員の講義を聞き概要を知る。
- ・ 源氏節やハンセン病についての出前授業を受ける。

(イ) テーマを決めて、より深く調べよう(7・8月)【取材活動】

- ・ 民俗資料館や、甚目寺観音、萱津神社などに出向いて、興味をもったことについて、調べ学習を進める。

(ウ) 調べたことをまとめよう(9月)

- ・ 調べたことをノートなどにまとめ、今後の学習の資料にする。

(エ) まとめたことの情報交換をしよう(9月)

- ・ 自分が興味をもった内容について友達に発信したり、友達の情報を聞いたり情報交換をする。
- ・ 調べた情報をテーマ別グループ学習に生かす。

ウ 「見て、聞いて、触れて甚目寺②～甚目寺の歴史・文化をまとめよう～」(10・11月)

「ふるさと甚目寺」に残る史跡や伝統芸能などに触れ、甚目寺の歴史の深さや価値を実感し郷土への愛着を高める。

(ア) 調べたことをもとにテーマを設定しよう(10月)

- ・ 地域の歴史について、調べたことをもとにテーマを設定する。

(イ) 発表の方法を考えて、準備しよう(10月)

- ・ 同じテーマをもつグループで、情報を整理・活用し、相手によく伝わるようなまとめ方・発表の方法を考える。
- ・ 写真・図・スライドなどの効果的な活用を考える。

(ウ) 発表会をしよう(11月)

- ・ 発表会の準備、練習を行い、保護者に向けて調べたことを発表する。
- ・ 発表会のふり返りをする。

(エ) 甚目寺の未来についてできることを考えよう(11月)

- ・ 発表会后、ふり返りをする中で自分たちが住む町のために何ができるかを話し合う。



【学芸員による出前授業】



【萱津神社への取材活動】



【発表会の様子】

③ 国語科や学級活動との連携を図った授業実践

ア ESD国語科 単元「立場を明確にして主張し合い、考え方を広げる話し合いをしよう」

われら歴史・文化調査隊「見て、聞いて、触れて、甚目寺②～甚目寺の歴史・文化をまとめよう～」の中心は、夏の取材や取材後の調べ学習を通して学んだことを、テーマごとに班になり総合学習発表会で地域の方や保護者に伝えることである。発表会までの班の話し合い活動では、問題の解決を図るべき話題が多くある。発表の方法を考えて、準備する中で対立する考えのどちらを選択すべきかという葛藤場面もしばしば見られる。そのような場面で意志決定を図るうえで、本単元「立場を明確にして主張し合い、考え方を広げる話し合いをしよう」がコミュニケーションスキルの向上に生かされるのではないかと考え、この授業を行った。

児童は、ディベート形式の討論会は初めての経験であり、「討論の進め方」に沿って、一つの問題を肯定・否定の両面から検討し、より多くの人を納得させるための話し合いを進めた。同時に、ここでは討論の流れを聞く立場にも焦点を当て、話し合いを観察し、その論点や争点を見いだすなどの聞き取りの観点をもち、議論を評価しながら聞く態度の育成も目指した。

討論会を計画的に進めたことによって、児童は立場を明確にして主張し合い、考え方を広げることができ、その後の発表会に向けての話し合い活動や準備・練習の中で、決して欠くことのできない重要な力となったと考える。



【討論会の様子】

イ ESD学級活動 主題「自分と相手を大切にするために」アサーショントレーニング

「見て、聞いて、触れて、甚目寺②～甚目寺の歴史・文化をまとめよう～」の活動は発表会に向けての班活動が中心となる。発表会を行う班は、夏の取材活動で同じ取材先を選んだ者同士で決められる。教師側が意図的に組んだメンバーではないために、リーダーシップをとれる中心的な児童がいない班や、わがままを通してしまう児童が多く集まる班もできる。そういった班構成の中、相手のことを考えながら自分の気持ちも伝え、好ましい人とかかわり方ができるように、アサーショントレーニングの講座を行った。

アサーションとは、自分も相手も大切にしながら、自分の考えや気持ちをその場にふさわしく表現することである。

今回は、ドラえもん3人のキャラクターを例に、「自分の消しゴムを勝手に使われたとき、ジャイアン、のび太くん、しずかちゃんならどう言うか」を考えた。児童からは、ジャイアンについては、「こら、返せ」「何勝手に使ってた、ぶんなぐるぞ」といった自分のことだけを考えたわがままな攻撃的な表現が出た。のび太くんについては、「黙ったまま、何も言えない」「ドラえもん、何とかして」と自分の主張を後回しにするはっきりしない表現が出た。しずかちゃんについては、「後で返してね」「次は、声かけてね」など、自分のことも考えるが、相手の気持ちにも配慮した表現となることを感じ取ることができた。



【のび太君なら?】



【3人のキャラクターを例に】

三つのパターンを考えた後、班に分かれてロールプレイを行った。ロールプレイをすることで、相手に与える印象を体験的に理解することができた。児童からは、「三つのパターンがあることを初めて知った」「自分も知らず知らずのうちにジャイアンみたいに相手にいやな思いをさせる言い方をしていた」「私はいつもののび太くんの言い方をしていると思う。なかなか言い出せないことが多いので、これからは意識して相手に伝えたいと思う」「やっぱりみんなが気持ちよく生活できるようになることはとってもいいことなので、相手も自分も納得できる言い方を言えるようになりたいと思う」などの感想が聞かれた。

このように、3人のキャラクターの会話から、「自分もOK、相手にもOK」という相手の意思を尊重しながらも自分の意思はきちんと通すことができる「アサーティブな表現」を学ぶことができた。そして、この表現方法を身につけたことが、発表会に向けての話し合い活動や準備・練習の中で、児童のコミュニケーションスキルの向上につながったと考える。

ウ ESD学級活動 主題「よいことさがし」

発表会の後、これまで共に活動してきた班のメンバーに改めてお礼やよいところ・頑張っていたことを伝えるために、手紙交換による「よいことさがし」を行った。発表会までの取組について、児童一人一人がさまざまな視点から互いのよさを見つけ、伝え合った。手紙に書くという作業は、言葉の重みや大切さを見直すきっかけにもなった。言葉は、無責任に発してしまえば、相手を傷つけることもあるが、相手を思いやるあたたかい言葉からは、自分が認められている喜びをもらうことができた。この活動では、班員が「自分のことを分かってくれている」という安心感や「このメンバーと発表会ができてよかった」という感想をもつ児童もあり、このような言葉を通した活動は、自己肯定感や自己有用感を育むのに効果的であったと考える。



【よいことさがしの様子】

エ ESD国語科 単元「表現を選ぶ～言葉について考えよう～」

この単元では、話し言葉と書き言葉、丁寧体と普通体などの文体の違いについて考えた。児童は、出前授業の依頼やお礼の文章などで、「公的」な言葉を使う機会が増える。それなりに文体の違いということは認識しているものと思われる。また、これまでインタビューや聞き取り取材で得た情報を文章にする経験もしている。そういった中、相手・場面に応じて、伝える方法や表現を選ぶことをねらいとして、この単元「表現を選ぶ～言葉について考えよう～」を行った。

第一に、自分が日常で無意識に使い分けている言葉に目を向け、「話し言葉と書き言葉」や「伝える相手や場面」によって同じ内容でも表現方法に違いがあることについて考えた。また、表現を選ぶ条件として「方法（話し言葉と書き言葉）」「相手」「場面」の3つにわけ、学習の見通しをもてるようにした。

第二に、「伝える方法による表現の違い（話し言葉と書き言葉）についての特徴を、教材文を例にそれぞれ表にまとめることで、比較しながら活動を行った。

第三には、「伝える相手や場面による表現の違い」について、教材文をもとにまとめを行った。相手や目的、場によって選ぶべき言葉が変わることに注意して書いたり、また相手や目的、場に応じ、言葉遣いがどのように変わるかを考えながら会話したりするためには、必要な授業であったと思われる。

(2) 実践の成果と課題

コミュニケーションスキルのトレーニングを目指した授業実践は、地域に伝わる伝統行事への参加体験を通して、また「ふるさと甚目寺」について調べてきたことを地域や地域外に発信する方法や自分が地域や地域外に発信したいことを分かりやすくまとめる中で、単なる知識としてではなく、実際にいろいろな場面で活用できるようになってきたのではないかと考える。

また、学級内における望ましい人間関係づくりを目指した交流活動や、相手の立場を考えながら自分の気持ちも伝え、好ましい人とかかわり方ができることを目標とした講座を行う中で、多くの児童が「自分も相手も大切にするよりよい人間関係」を築くことができるようになってきた。それは、講座の内容だけでなく、国語科や学級活動の授業をつなげたからであると考えられる。こうした取組の結果、多くの児童が自分を大切にしながらも自分の気持ちを相手にうまく伝えるスキルを確実に向上させることができた。

今後、コミュニケーションスキルをさらに向上させるためには、ESDカレンダーや総合的な学習の時間指導計画への位置づけが必要である。また、望ましい人間関係づくりのための取組と同時に、人間関係で問題が起きた場合に、その解決を図る個別のかかわりや児童の内面に応じたかかわりを大切にしていかなければならないと考える。